

争論

「班」と「個配」を考える

世界にあまり例を見ない日本の生協の特徴として「無店舗事業」がある。なかには店舗を全く持たない生協もあるが、本号の「争論」では、そうした2つの生協からお話を伺った。「生協しまね」と「神奈川ゆめコープ」である。

といっても、この2つの生協、ある意味では対照的である。鳥根県の市部と郡部をカバーする「生協しまね」は、班別共同購入が事業高の8割を占める。一方、首都圏の都市部に展開する「神奈川ゆめコープ」は個配で有名なパルシステム事業連合に加盟し、その事業はほとんどが個配で占められている。まず班ありき、班に加入してこそ組合員。そこから運営も活動も始まるとして班を重視し、事実、いまもって生協活動の基本は班であり続ける「生協しまね」。それに対して、個人と生協を1対1の関係とおき、個配中心で、班はごく一部でしかなかった「神奈川ゆめコープ」。一見するところ、組合員の組織のしかた—組合員と生協との連結のあり方—が、正反対であるかのように見える。したがって、うまく「争論」が成り立ちそうなのだが、実は意外にそうでもない。

組合員の暮らしと、地域社会の変化が、都市と郡部とを問わず「これまでどうり」を許さなくなるなかで、この二つの生協は、きわめてまっとうに変化に向き合い、工夫を重ね、今の時点では、かなり似通った課題の立て方をしているように見える。

生協しまねは、班について「見てきたつもりだったが実は見ていなかった」として、「組合員

にとつての班」という視点から班の見直しをはかった。「班ありき」から「組合員ありき」に、舵を切ったことになる。「班」という呼び名は同じだが、班の性格はかなり変わるのではないか。個々の組合員が寄り合い、多様な構成・多様な付き合い方が生まれる。小さくても、参加の強弱はあっても、それを応援して、地域のつながり拠点になってほしい…、ということだと思ふ。

神奈川ゆめコープは、自立した組合員の協同による、「個人対応、くらし課題解決」がモットー。事業にも活動にも参加の場が開かれているが、この自立のハードルがかなり高い。

このハードルを軽々越える組合員も多くて、その豊富な人材を活かして多様な活動が出来ている。その一方で、ハードルを越えてこない組合員もかなりいるようだ。その声やニーズを拾うには、その人たちのいる地域で、気軽に来られる小さな集まりがあるといい…。という方向にあるようだ。地域に暮らす組合員1人1人に寄り添う集まり—。なんだか、こーぶ鳥根の目指す方向に似ている気がする。

結局、必ずしも個配は個配で突っ走るとか、班だけで突っ走るということではなくて、組合員にとってどのような場が地域にあればいいのか、それぞれの生協がその歴史を踏まえて模索していると感じた。したがって、うまく「争論」にはならなかったようだ。

中川 順子

(当研究所研究委員 元立命館大学教授)